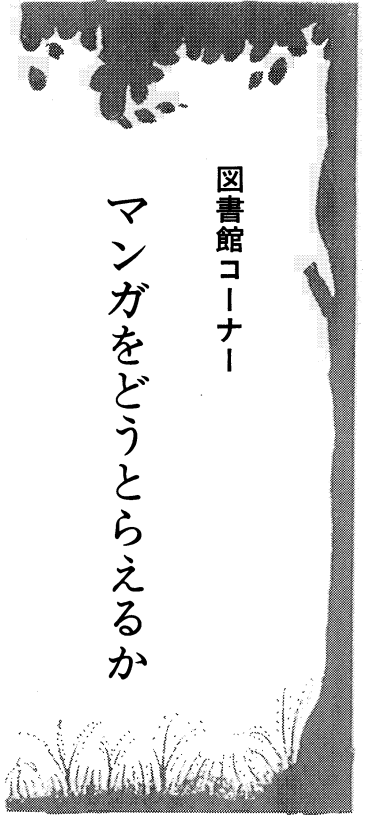


図書館コーナー

マンガをどうとらえるか



子供たちは、マンガをどのように読んでいるかの実態を調査した次のような表があるので、御覧いただきたい。

①の問いかけに対して男子七十名、女子五十名のうち、読んだと答えたもの六十二名(八九%)、女子の場合五十一名(九六%)である。次に、その一週間内に読んだ子供について、何冊位読んだか、マンガの本と雑誌に分けて聞いたのが②の表である。
また中学生について次のような結果もある。

小学生の実態 (6年生 男子70名 女子53名)

①今週1週間のあいだに、マンガの本やマンガ雑誌をよみましたか。

	男子	女子
読んだ	62人	51人
読まなかった	8	2

② 1週間に読んだ冊数 (マンガの本)

男子			女子		
1冊	12人	12人	1冊	11人	10人
2冊	3	1	2冊	8	9
3冊	5	3	3冊	7	6
4冊	7	0	4冊	4	1
5冊	3	1	5冊	2	2
...			...		
10冊	2	3	10冊	1	2
...			...		
15冊	1	2	15冊	1	1
最高	41冊	20冊	最高	30冊	15冊
		3人			

これらの表は、いずれもある読書団体の調査による、都市部の小・中学生を対象としたものであるが、一般的傾向はよみとることができよう。
つまり、読書との比較においてみた場合は、テレビに費やす時間がかなり多く、マンガをみる時間は意外に少ない。しかし表①②にあらわれているように、なんらかのかたちでマンガ及びマンガ雑誌との接触は相当日常的に行われているというのが事実である。
「今の子供は本を読まなくなった。」

中学生の実態 (1年生～3年生)

③ 放課後、家へ帰ってから、次のことをするの、どれくらいの時間をつかうか。

	読書	テレビ	マンガ	勉強
0分	37.9	2.5	31.4	10.3
15分	16.6	3.3	14.7	6.7
30分	17.7	4.3	25.2	17.9
1時間	11.3	11.5	16.3	20.3
1時間半	4.4	11.2	5.4	13.9
2時間	8.8	2.0	3.7	14.8
2時間半	1.1	12.7	1.2	7.7
3時間以上	2.3	34.5	2.0	8.4

テレビとマンガばかりみている」という嘆きをよく耳にするのであるが、それは事実であるだろう。しかし、マンガやテレビを無理に取り上げればコトはずむのであろうか。おそらくそうではあるまい。第一そのようなことは不可能であるばかりでなく、愚かなこととさえある。

むしろ、マンガというのは(テレビも同様であるが)子供の文化としても、一つのを築き上げてきてきているので見落としてはならない、という認識のもとに、いい本を勧めるなり本を読む生活を子供自身の生活の中に、築いていかなることを考えることのほうが、マンガを取りあげることよりも数段現実的であり、建設的であると思える。
子供とマンガのかかわりということ、なにも今にはじまったことではない。戦前と戦後の一時期、関係者の間では「マンガおやつ論」というのがあった。子供は見るには見るけれど飛びつくけれど、すぐに卒業していくもの

だといういい方である。だが今の状況はそんなナマ易しいものではなく、マンガ主食論”さえまかり通る状況である。

しかしそれにしても、あまりにもマンガに対処する態度がお粗末すぎたのではないか。頭から拒否するか、あいまいなままに状況に流されるのかどちらかであったと思えるのである。今こそ正面から取り組んだ、今の子供の文化としての正しい位置づけがきちんとなされねばなるまい。

本稿はマンガ論の展開にその目的があるのではなく、マンガをどうとらえるか——特に子供文化の中のマンガ——を考えるための資料提供にある。以下、県立図書館所蔵のものを主としてリストを紹介したい。

- 『子どもとマンガ』(秋山弘 図書館問題研究会大阪支部発行の「学習権の保障と図書館活動」所収)
- 『小学生のマンガ指導』(深川文学教育の会・明治図書)
- 『現代マンガの思想』(石子順三・太平出版社)
- 『子どものマンガをどうする』(石子順三・啓隆閣新社)
- 『マンガ芸術論』(石子順三・富士書院)
- 『マンガ文化』(副田義也編・至文堂発行の「現代のエスプリ・二〇八号」)
- 『漫画家族』(田中和男編・富士ゼロックス社発行の「GRAPHICATION・一九七七年三月号」)
- 『少女マンガの世界』(前掲書・四月号)